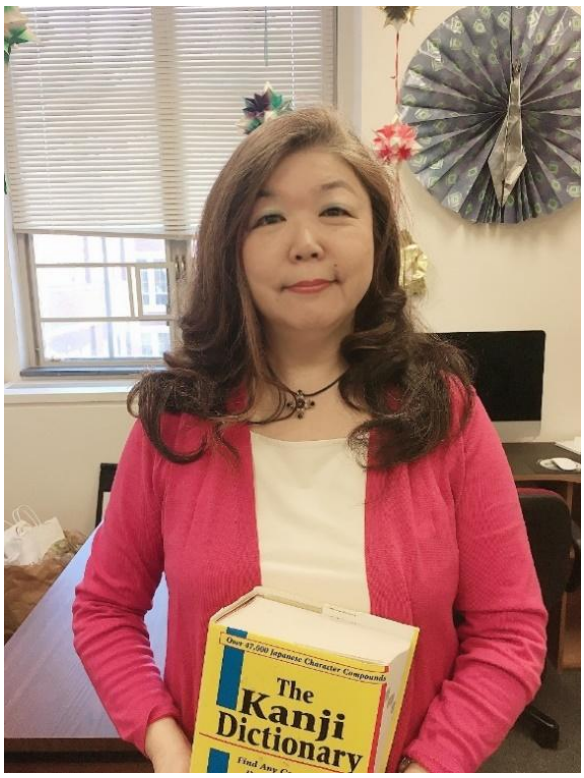
「女優の玉手」から日本語教師へ



玉手まり子さん

現在、ロチェスター大学（米国　ニューヨーク州）外国語・比較文化学部、
日本語教育専任教授

＊大学で日本語を教える傍ら 2014 年までロチェスター日本語補習校国語教諭および校長を兼任。

1984 年明治大学文学部文学科　演劇学専攻卒業
1987 年　テンプル大学経営大学院留学
（米国　ペンシルバニア州）
1991　年　経営学修士号（MBA）取得

明治大学時代と就職

初めまして。私は米国ニューヨーク州の北西部にあるロチェスター大学というところで、過去 三十余年にわたり日本語を教えてきました。

私は自分の生徒たちが、日本のアニメや漫画で見聞きした日本語の表現と、今日授業で習った文法との関連性に気づいた瞬間、「なるほど。あれはそういう意味だったんだ！　やっと理解できた！」と目をきらきら輝かせて喜ぶ姿を見るたびに、この仕事をしていて本当によかったと心から思います。

しかし、私は最初から日本語教師を目指していたわけではありません。学生時代は、年に数回明大 ESS ドラマセクションの公演で舞台に立つことを一番の生き甲斐とし、将来はプロの女優を目指すなどと豪語して ESS の皆さんから「女優の玉手」と呼ばれていました。
その後心境の変化があり、卒業後は平凡に輸出会社に就職しましたが、数年後に起こった円高時代の到来を機に、アメリカの経営大学院に留学し、一時は国際的に活躍するビジネスウーマンを目指したりもしました。

アメリカで日本語教師になったキッカケ

今から思えば、20 代なかごろまでの私は、自分自身の内面にある本性とは裏腹に、自分には向かいないものに憧れ、間違った努力をしていました。
しかし、例え方向の間違った努力ではあっても、その時どきで常に何かに夢中になっていたからこそ、最終的には自分にとって天職ともいえる日本語教師という職業に巡り合うことができたのだと思います。
私が日本語教師になったのは、経営大学院留学中に学費を稼ぐために始めたアルバイトがきっかけです。
1980 年代後半は、日本企業の経営哲学や品質管理システムが世界中で注目されていた時期であり、世界各地で日本語ブームが起こった時代です。そんな時代に、私は留学先のテンプル大学で日本語コースの Teaching Assistant (TA) として働き始めました。

もともと言語を学ぶのが大好きだった私は、例えば、一見複雑に見える日本語の動詞の活用が、日本語のテキストでは、自分が中学・高校で習った「国文法」よりよっぽど分かりやすく理路整然と説明されていることに興奮を覚えました。
また、元女優志望だった私は、「悔しい」「照れる」など、ニュアンスの微妙な言葉をパントマイムや顔の表情で説明するのが得意でした。さらに、従来は座ったまま口頭で機械的に行われていた文型練習にロールプレイングを導入し、学生たちが特定の文型を何度も使って即興劇のように会話ができるようにしました。すると、学生たちは非常にやる気を出し、練習効果も上がりました。
実は、ロールプレイングも即興劇（インプロヴィゼーション）も、決して私独自のアイデアなどではなく、ドラセクのトレーニングでいつもやっていたことでした。

人生を決定する運命的な出会い

こうして日本語 TA の仕事にすっかりハマってしまった私は、例えアルバイトでも、どうせやるなら自己流ではなく、もっとしっかりしたトレーニングを受けたいと思い立ち、大学院の夏休みを利用してニューヨーク州にあるコーネル大学で日本語教授法のワークショップに参加しました。そしてここで、私は

その後の人生を決定する運命的な出会いを経験することになります。

　コーネル大学からは車で一時間半ほどの距離にあるロチェスター大学というところから、ある教授がリクルートを兼ねてこのワークショップに参加されていました。
　私はこのＴ教授に気に入られ、スカウトされて、その年の９月からいきなり日本語講師としてアメリカの大学の教壇に立つことになったのです。
　迷いはありましたが、経営大学院の方は一旦休学しました。26 歳の時でした。

明治ＥＳＳ時代の経験が生きる

　当然のことながら、未熟で経験もなかった私は大学講師として様々な失敗を犯し、試行錯誤を繰り返しました。
　しかし、ESS 時代に経験したことが、ここでも私を救ってくれました。学生時代、人一倍負けず嫌いだった私は板橋杯・三上杯などのスピーチコンテストでは俄然張り切り、賞をいただいたりしていました。
　その時の経験を活かして、私は毎年数名の学生を在米日本国大使館主催の日本語弁論大会に応募させ、原稿の構成からデリバリー、間の取り方に至るまで綿密に指導しました。
　その結果、ワシントン DC で行われた全米大会で多くの教え子たちを優勝・入賞に導くことができました。
　結局、私は元来 言葉を使って何かを表現することが好きな性分だったのだと思います。そして、そのアウトレットが演劇であったりスピーチであったりしたわけで、明大 ESS でそれらの活動を通して先輩・後輩、そして同期の皆とぶつかり合いながらも全力で青春したことが、今の自分の原点になっています。

語学教師として一番優先していること

　私が語学教師として一番に優先していることは、まず初級・中級の段階で学生たちに基本的な文法をみっちり仕込み、揺るぎない基礎を築いてやることです。
　もちろん、人と会話をする時に常に完璧な文法で話せということではありませんし、カタコトでもブロークンでも、伝えたい心があればある程度のことは伝わります。
　しかし、きちんとした文法の知識があれば、その言語をあらゆる分野で活かせますし、何よりも、表現できることの幅が圧倒的に広がります。
　昔から日本の英語教育は文法重視の読み書き中心だと批判されてきました。だからこそ ESS の皆さんの多くは、もっと実践的な会話能力を身につけたいという動機で英語部に入部されたのではないでしょうか。
　それは私も同じでした。しかし、私は日本の学校で受けた英語教育にも感謝

しています。
　私が留学生として最初にアメリカに来た時、辞書を片手に膨大な時間を費やしながらも、何とかテキストが読めたり宿題のレポートが書けたりしたのは、若い時に受けた文法重視・読み書き中心の英語教育のお陰です。その後アメリカでの生活が長くなるにつれ、聞き取りや会話の方も次第にネイティブについて行けるレベルになりました。

英語部現役生の皆さんへ

　現役の皆さんの中には、既にご自分の将来について明確な目標を持たれている方も、現在模索中という方もおられることと思います。特に昨今はコロナ禍が学生生活や就職活動にも影響を及ぼし、将来が見えてこないという方も多いかもしれません。
　しかし、先が見えない時にこそ、今できること、目の前にあることを精一杯やってください。そして、何かを思いついたら、迷っているよりもまずはそれをやってみてください。その判断が例え間違っていたとしても、そこからまた新たな道が必ず開けます。

　最後に、今回こちらに寄稿させていただいたことと多少重複するかもしれませんが、パンデミックが始まる直前に『明治』第 85 号にも私の稚拙な文章が掲載されました。ご参考までに、私の手元にあるゲラ刷りのリンクを（本当はいけないのかもしれませんが）ここに貼らせていただきます。

https://drive.google.com/file/d/12zTkEV9AT-Q-p-tYeLDuh_ALdVJxxCmF/view?usp=sharing